

## 論 文

## 『賦光源氏物語詩』を詠む (八)

— 御幸・蘭・椀柱・梅枝・藤裏葉 —

本 間 洋 一

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
教授

## Reading the “Fu Hikaru Genji Monogatari Shi” (eight)

— Miyuki・Fujibakama・Makihashira・Umegae・Fujiuraba —

Yoichi Honma

Department of Japanese Language and Literature,  
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Professor

## 【要旨】

中世前期に編纂された『賦光源氏物語詩』の解釈・注釈稿の第八稿。それぞれ巻を詠む漢詩（七律）が、どのように物語の内容と連関しているか明らかにする。

【キーワード】 源氏物語 漢詩 翻案物

## 二十九 御幸（玉鬘并之七）

小塩山麓大原野	小塩山麓 <sup>をしほさんろく</sup> 大原野 <sup>おおはらの</sup>
諸衛韋韞奉帝皇	諸衛 <sup>そゑ</sup> の韋韞 <sup>ゐかう</sup> 帝皇 <sup>ていこう</sup> を奉ず
万乗幸西鷹獵路	万乗 <sup>いん</sup> 西 <sup>にし</sup> のかたに幸す 鷹獵 <sup>ようれふ</sup> の路 <sup>みち</sup>
三台以下扈從場	三台 <sup>さんたい</sup> 以下 <sup>いひだ</sup> 扈從 <sup>こじゆう</sup> の場 <sup>ば</sup>
女王微志紫衣贈	女王 <sup>おうりもの</sup> が微志 <sup>こいし</sup> 紫衣 <sup>むらさき</sup> の贈 <sup>おくりもの</sup>
公主懇懷玉櫛箱	公主 <sup>こうしゆ</sup> が懇懷 <sup>こんくわい</sup> 玉櫛 <sup>たまし</sup> の箱 <sup>はこ</sup>
裳着結腰初見父	裳着 <sup>もぎ</sup> に腰 <sup>こし</sup> に結ばれて 初めて父 <sup>ちち</sup> に見え
父成賓礼幾巡觴	父 <sup>ちち</sup> 賓礼 <sup>ひんれい</sup> 成つて 幾たびか觴 <sup>さかづき</sup> を巡らせる
（七律。皇・場・箱・觴（下平声陽韻））	

巻名は第三句に「幸」として詠込まれている。この巻は、師走に大原野行幸が行われたことに始まる。見物する玉鬘は一行の中に父の姿を認め、冷泉帝の比類なきめでたさに心動かされて、光源氏が勧めた出仕にも前向きになる。光源氏はその前に彼女の裳着をすませるべく、翌二月と決めて父の内大臣に腰結役を依頼する。一旦は辞退されたものの、母の大宮を見舞って内大臣へのとりなしを頼み、彼も事の次第を知って承諾する。裳着の十九日には方々から御祝いの品々が届けられて、腰結役の内大臣は心のこもった光源氏の配慮に感謝して和歌を贈答し合う。続く巻の末では、常夏の巻で人々の笑いの対象となっていた近江君が再び登場。玉鬘への羨望と対抗意識から尚侍の職を所望するなど軽はずみな言動をして人々を呆れさせる。と同時に、その娘の近江の君をからかい愚弄する内大臣に対して、読者はみじめな人だという思いを禁じえないのではあるまいか。もっとも、漢詩の内容自体は、近江の君の登場前で詠みさしており、シニカルな場面は避けられている。因みに聯毎に分けて訳せば以下のようなようになろう。

（十二月に）小塩山の麓の大原野（に行幸ということ）、多くの護衛の者

が弓射や武具をととのえ、帝にお仕え申し上げるのでございました。

帝は鷹狩の地への道を西へとお出かけになられ、（大臣はじめ公卿）以下（多くの方々）がつき従ったのでございます。

（光源氏は玉鬘様の裳着を二月十六日に行われまして、その時様々な贈物がございましたが）常陸宮の御方（末摘花）はささやかな思いをこめ（青鈍色の細長や袷の袴一揃えと）紫の白けてみえる霞模様の小桂などを（立派な衣装箱に入れて）贈られましたし、（内大臣の母、玉鬘様の祖母で、桐壺院の妹君の）大宮様にはねんごろな思いのこもった美しい御櫛の箱をお届け戴いたのでございました。

（内大臣様が）裳着の当日腰結の役をつとめられ、玉鬘様は初めて実の父上と顔を合わせなされたのでございましたが、父上様は賓客としてもてなされまして、（お喜びで）どれ程杯をくみかわされたことでもございましょう。

首・領聯は、巻頭あたりの、

その十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを……今日は親王たち、上達部も、みな心ことに、御馬、鞍をととのへ……装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下、はた、まして残らず仕うまつりたまへり。……親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、めづらしき狩の御装ひどもを設けたまふ。近衛の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、気色ことなり……。

（③ 289頁9行～290頁10行）

とある部分をふまえる。「小塩山」のことは物語本文には見えないが、有名な業平歌「大原や小塩の山も今日こそは神代のことと思ひ出づらめ」（『古今集』八七一「二条の後の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野にまうでたまひける日よめる」）や、貫之歌「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む」（『後撰集』一三七三「左大臣の家の男子女子、冠し、裳着侍けるに」）でも大原野（神社名でもある）と密接なことが知られ、詩句に取入れられたものであろう。「諸衛」は宮中の守護や行幸の警護を行う六衛府（の武官）を指す。小学館本の物語本文は「近衛」になっているが、古注が準拠した本文は「諸衛」とあり、先例の延長六年（九二八）十二月の大原野行幸を引用した『李部王記』の記事に「諸衛鷹飼親王公卿摺布衣」、「西宮抄」に「公卿以下諸衛及鷹飼等……」と見えている。他に「儒士

任「諸衛」自「当職」遷任例」（三善道統「請レ被下特蒙ニ恩恤」因「准先例」挙申達弁官右衛門権佐闕上状」『本朝文粹』卷六・169）や三善清行「意見十二箇条」（同上卷二・67）にも見出せる語。「韞」は「韞」にも作り、弓を射る時に左の臂に着けるもので、ゆくてとも言う。「韞」はなめし皮製であったことによる。李陵「答二蘇武一書」（『文選』卷四一）に「韞、韞、韞、以禦二風雨、羶肉醢漿、以充二飢渴」一とあり、李善注に「説文曰、韞、臂衣也。漢書董君緑幘伝、韞注曰、韞形如三射韞一以縛二左右手、以於レ事便也」、張銑注には「韞、皮也。韞、衣袖……以レ皮為レ袖」などと見えている。「帝皇」は「皇帝」に同じく天皇を指す。ここは平仄を整え押韻する為に顛倒させて用いた。張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「聖上同二天号于帝皇」一、左思「蜀都賦」（同上卷四）にも「崑崙有二帝皇之宅、河洛為二王者之里」一とあり、三善清行「意見十二箇条」（応下消二水旱一求中豊穰上事）にも「帝皇之誠、依二禪僧一而易レ感」一と見えている。

領聯の「万乗」は天子・天皇を指す。『文選』にはよく見える語で、張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「雖二万乗之無レ懼、猶恍二惕於一夫」一とあり、薛綜注に「万乗、天子也」と記され、「万乗威加新海内、数行涙落故郷情」（『説史記一竟説』史得二高祖二「田氏家集」卷上・37）、菅原淳茂「月影満二秋池一詩序」（『本朝文粹』卷八・209）にも「太上法皇、雖下入二三蜜之道一出中万乗之家上猶未レ捨二此地風流」一などと用いられている。「鷹獵」は鷹を使い獵をする事で鷹狩に同じ。桓武天皇も鷹を愛されたというが、嵯峨天皇は鷹狩を好んで政獵の記事が史書にも見え、自ら漢詩（『凌雲集』）にも詠んで、『新修鷹経』を撰させた（弘仁二年と云う『嵯峨野物語』『養鷹記』とも伝えられる。菅原道真が「放二鵠、獨一馳」（鷹犬を放って走らせる意。「競狩記」、紀長谷雄が「肥馬輕裘与二鷹犬一、毎レ日群遊俠客筵」（『貧女吟』）と記すように、獵には犬も重要な役割を担うのだが、物語文中には記されない。「三台」は人臣である三公（太尉・司空・司徒）の位を指すが、本朝では大臣（太政大臣・左右大臣・内大臣）の唐名と考えてよい。「三台樹レ位、履レ道是鍾」（曹植「王仲宣誄」『文選』卷五六）とある呂向注に「三台、星名、三公之象也」と見え、「三台九棘、百辟千僚」（三善道統「為二空也上人一供二養金字般若経一願文」『本朝文粹』卷一三・409）と用いられている。猶、物語では太政大臣の光源氏は行幸に参加していない。「扈從」は天子につき従うこと。「扈從横行、出二乎四校之中」一（司馬相如「上林賦」『文選』卷八）とある呂延濟注に「大衆從レ君也」と見え、「扈從吉野宮」（『懷風藻』73紀男人的詩題）などよく見える語。領聯は、玉鬘の裳着に際して祝いの品々が届けられる場面を背景とする。第五句の「女王」はここでは常陸宮親王の女である末摘花を指し、「常陸の宮の御方、あ

やしうものうるはしう、さるべきことのをり過ぐさぬ古代の御心にて……青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霞地の御小桂と、よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり。……これ、いとあやしけれど、人にも賜せよ」(③13頁15行～314頁10行)などと贈物した部分による。第六句の「公主」は大宮(桐壺の妹、葵の上や内大臣の母)を指し、「三条宮より忍びやかに御使あり。御櫛の箱など、にはかなれど、事どもいときよらに」(③312頁1～3行)仕立てた品と「玉匣」(玉櫛箱)を詠込んだ歌が届けられたことをふまえている。「女王」を皇室の女子(で内親王でない者)の意で用いるのは和習か。「皇大妃内親王及女、王嬪封各有差」(『続日本紀』大宝元年七月二日条)「充三華山法皇外祖母恵子女、王封戸年官年爵一勅」(『本朝文粹』卷二・50慶滋保胤作。恵子は代明親王女)などに見える。「微志」はここではささやかな気持ち(ばかりの品)の意(恐らく末摘花の謙辞を込めて用いるか)。「願陛下矜三愍愚誠、聽三臣微志」(李密「陳情表」『文選』卷三七)「斯須下得接三佳遊境、微志所之愁詠吟上」(藤原明衡「初冬書懷」『無題詩』卷五・316)などはその語例。「公主」は天子の娘。「至三周中葉、天子嫁三女于諸侯。天子至尊、不三自主婚、必使三諸侯同姓者主之。始謂三之公主。秦代因之亦曰三公主。史記云、李斯男皆尚三秦公主、是也。漢制、帝女為三公主、帝姉妹為三長公主」(『初學記』卷一〇・公主)、「宮殿樓閣、百官曹序、親王公主之第宅、后妃嬪御之宮館」(『三善清行』意見十二箇条『本朝文粹』卷二・67)などである。「懇懷」はまごころのこもった思い、ねんごろな心。

尾聯は、玉鬘の裳着の日(二月一六日)、父の内大臣が腰結(裳のひもを腰に結ぶ)役をつとめる次の場面を背景とする。

内大臣は、さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうし後は、いつしかと御心にかかりたれば、とく参りたまへり。……亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。例の御設けをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御看まゐらせたまふ。……いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなければ、ひき結びたまふほど、え忍びたまはぬ気色なり。主の大臣、「今宵はいにしへさまのことはかけはべらねば、何のあやめも分かせたまふまじくなむ。心知らぬ人目を飾りて、なほ世の常の作法に」と聞こえたまふ。「げに、さらに聞こえさせやるべき方はべらずなむ」。御土器まゐる……。

(③316頁3行～317頁3行)

早く娘に会いたいと思いつつ六条院に参上した内大臣は御簾の中に招かれて酒肴のもてなしを受け、娘の腰紐を結び、光源氏の心配りに感謝しつつ和歌の贈答をすることになる。第七句「初見父」と玉鬘の視点で詩を詠んでいるのが、物語本文とは異なる点であろうか。末句、内大臣が六条院の来賓としての礼を尽くすとは、光源氏の懇切な配慮に改めて礼を述べ、和歌を交わす展開の含意であろう。物語本文では大いに杯を傾けたという描写は必ずしもないが、内大臣が「御土器まゐり」、「今までかく忍びこめさせたまひける恨みも、いかが添へはべらざらむ」(③317頁5～6行)と、光源氏に絡んでいるように漢詩作者は受けとっているのかも知れない。「賓礼」は客人としてもてなされること。「賓礼毎進以讓」(『礼記』坊記)「賓礼来時懷三土雁、旅人婦処泣三珠蛟」(「客館書懷寄三渤海副使大夫」)「菅家文章」卷五)と見える。「巡觴」は酒杯をめぐらす。「素壁聯三題分三韻句、紅炉巡三飲暖三寒杯」(「花樓望三雪命三宴賦三詩」)「白氏文集」卷二〇)や「花間酌三酒幾催三巡、酣暢難三堪欲三暮春」(橘正通「酒從三花裏三酌」)「善秀才宅詩合」)などという類。

### 三十 蘭(同八)

尚侍須聞吾教誨	尚侍須らく聞くべし	吾が教誨
女唯三従又無望	女は唯だ三従あるのみ	又望むこと無かれ
妍姿相映対明月	妍姿相映えて	明月に對ひ
浮命纔懸惜季商	浮命纔かに懸けて	季商を惜しむ
詞頭紫蘭花結露	詞に頭はる	紫蘭の花に結ぶ露
契残玉篠葉分霜	契りに残る	玉篠の葉分けの霜
冬初参内期徐近	冬の初めの参内	期徐く近く
書札競来筆不遑	書札競ひ来りて	筆遑らず
〈七律。望・商・霜・遑(下平声陽韻)〉		

「蘭」は「兼名苑云、蘭一名蕙(蘭、恵二音。和名本草云、布知波賀万。新撰万葉集、別用三藤袴二字)」(『和名抄』卷二〇)、『和漢朗詠集』(巻上・蘭、290)に「ぬし知らぬ香こそはへれ秋の野に誰がぬぎかけしふじばかまぞも」(素性)と見えるように藤袴を指し、巻名は第五句に「紫蘭」として詠込まれている。この巻は自分のありように孤り苦悩する玉鬘の様子に始まる。そのもとへ光源氏の使いで夕霧が訪れて、尚侍任命の帝意を伝えと共に蘭(藤袴)を差入れ歌を詠みかけ、自らの思いをかき口説く。その後、父に復命した彼は、玉鬘に対する父の存念を問い



結めるが、父への疑念は晴れない。玉鬘が大宮逝去による喪服を脱ぎ、十月に出仕と決まるや、彼女に懸想していた人達は皆がつくりする。父の使いで訪れた柏木も伝言を語りながら怨言を述べ、歌の贈答をして退くが、彼を通して玉鬘に並々ならぬ思いを抱いていた鬘黒大將は熱心に縁組みを求め、他にも螢兵部卿宮や左兵衛督等多くの手紙や歌が彼女のもとにもたらされる。唯一返歌した宮への歌はその気持ちに汲み取りをにじませたものであった。以下聯毎に訳してみたい。

尚侍（の玉鬘さま）よ、よくお聞き召されよ、この私（詩作者）の教えを。

（光源氏が仰っておられるように）女性にはただ三従あるのみで、（他に）望んではなりません。

月に向かって居りますと、（柏木様の）美しい姿は照り映えるようでございますが、また、（玉鬘様に文を寄せられた）鬘黒様も（彼女の出仕はないものと）生命をかけて頼みにしておられたのですが、それも今ははかないと晩秋のあわれを感じておられるのです。

野辺の藤袴の花に結ぶ露を、（訪れた夕霧様の）和歌は表現しておりました（が、それは彼の玉鬘様への思いを訴えたものでございました）し、（螢兵部卿宮様の）お贈りになった歌も玉簀の葉毎に降りた霜のような（御自身の）思いだけでもせめて知ってもらいたいという思いを込めたものでございました。

（玉鬘様の御出仕は）冬の初め（十月）ということになり、その参内の時期も次第に近付いて参りましたところ、多くのお手紙が競うように届けられたのでございましたが、（彼女は）御返書なさる暇もなかったものでございました。

首聯は、物語の冒頭、尚侍の宮仕えをめぐって悩む玉鬘（③333頁11行目では「尚侍の君」と表記されている）を念頭に置きつつも、夕霧が父と玉鬘との関係を問いつつ、光源氏が答えた言葉、「方々といと似げなきことかな。なほ、宮仕えも何ごとをも、御心ゆるして、かくなと思されんさまにぞ従ふべき。女は三つに従ふもの、にこそあれど、ついでを違へて、おのが心に任せんことはあるまじきことなり」（③336頁10～13行）をふまえながら詠むものである。「教誨」は教えさす、教訓。「讓三老孝悌、以下不教誨之過上」（司馬相如「喻巴蜀檄」『文選』卷四四）「吾加二教誨、宜莫殺之」（『続日本紀』天平宝字元年七月二日）はその先例。「三従」は古注に指摘されているように「礼記郊特牲云、婦人従人者也（幼従二父兄、嫁従レ夫、夫死従レ子）」（『紫明抄』卷六・ふちはかま）により、「有三従之道。在レ家従二父兄、適レ人従レ夫、夫死従レ子」（『孔子家語』本命解）とも見

え、本朝では『世俗諺文』（卷上・81「三従」）。『礼記』所引）の他に、「在レ家従レ父、出レ家従レ夫、夫死従レ子（謂三之三従）」（『口遊』人倫門）とあるのも知られていよう。

領聯は、柏木が姉弟の関係にある玉鬘のもとを訪れ、父内大臣の言葉を伝えると共に自ら怨言を述べたて、和歌を贈答し合った後、

月限なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましく華やかにていとをかし。宰相中將（夕霧）のけはひありさまには、え並びたまはねど、これもをかしかめるは、いかでかかる御仲らひなりけむと、若き人々は、例の、さるまじきことをとりたてめであり。

（③342頁2～7行）

という場面を背景にしていよう。第四句は、

九月にもなりぬ。……持て参る御文どもを……大將殿のには、「なほ頼み来しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心づくしに、

（鬘黒）数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき」……

（③344頁1～8行）

と嘆く鬘黒の心情に関わるものであろう。「妍姿」はあでやかな美しい（柏木の）姿。この語は「縦令妍姿、艶質化為レ土、此恨長在無二銷期二」（『李夫人』『白氏文集』卷四）「芳意浅深応二誘引、妍姿多少作二良媒二」（一条天皇「春色伴花来」『類聚句題抄』166）などのように女性や花（の美しさ）に用いるのが一般か。「浮命」ははかない命。浮生に殆ど同意で用いているだろう（命は仄声、生は平声、この句の二字目は仄声字が求められる）。「浮命八句何震有、往生九品任二南無二」（菅原在良「冬日遊三田融寺」）『無題詩』卷一〇・681と見える。「季商」は晩秋九月のこと。「梁元帝纂要曰……九月季秋、亦曰二暮秋末秋暮商季商抄秋二」（『初学記』卷三・秋）とあり、「季商景趣雖レ揺レ意、此処幽閑興不レ堪」（輔仁親王「山寺即事」『無題詩』卷一〇・729）と用いられている。

頸聯の第五句は、領聯の前の場面に戻り、夕霧の詠んだ「おなじ野の露にやつる藤袴あはれかけよかことばかりも」と、玉鬘の返し「たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やかことならまし」（③332頁7～12行）を念頭に作られたものであ

るが、第六句は頷聯の柏木・鬚黒の件の後に見える螢兵部卿宮の和歌「朝日さす光を見ても玉簪の葉分の霜を消たずもあらなむ」(③34頁11行)を背景に詠じたものである。一部前後するが、いずれも出仕の決まった玉鬢に懸想人が手紙を届けてくる場面と関わるものである。「紫蘭」は「紫蘭丹椒、施和必節」(曹植「七啓八首」其二「文選」卷三四)「秋月晚生丹桂実、春風新長紫蘭芽」(「予与二微之」老而無子発三於言歎……)「白氏文集」卷五六)などであるが、ここでは藤袴のこと。「踏レ露路迷三紅葉色、迎レ風衣染三紫蘭香」(藤原為時「嵯峨秋望」『新撰朗詠集』卷上・秋興207)と見える。「玉簪」は美しい簪、矢竹(やたけ)といった竹の類。「簪」は彼に同じ。

尾聯は、玉鬢の出仕の時期が「月立たばなほ参りたまはむこと忘あるべし。十月ばかりに」(③338頁1〜3行)と決められたことと関わり、既に前聯でも触れたように懸想人達の手紙が競うように彼女のもとに寄せられて来た場面を受ける。だが、彼女自身は読む意志もなく、ただ女房が読むのを聞き流すという状態だから、詩に云う「筆不遑」どころか、殆ど返事をするつもりなどなかったのである(兵部卿宮だけにはしているが)。「書札」は手紙のこと。「客従二遠方一来、遣二我一書札一」(古詩十九首)其一七「文選」卷二九)と見える張銑注に「札、筆也。謂レ書也」とある。「不遑」は余裕やひまがない意。「低レ腰復斂レ手、心体不レ遑レ安」(酬二李少府曹長官舍見贈)「白氏文集」卷九)「候節時無レ誤、齋心採不レ遑」(賦二得躬桑二)『菅家文章』卷一)などの例がある。

### 三十一 被柱 (同九)

人心反覆眼前在	人心の反覆 眼前に在り
間旧愛新兼不図	旧を間て新を愛すること 兼ねて図らさず
縦出華亭雖従母	縦ひ華亭を出で 母に従ふと雖も
断当被柱勿忘吾	断じて当に被柱よ 吾を忘るること勿るべし
雲霄仙客歌声曙	雲霄の仙客 歌声の曙
羅綺佳人袖色殊	羅綺の佳人 袖の色の殊なり
井手山吹今已盛	井手の山吹 今し已に盛りに
何為濃艶隔中途	何為れぞ濃艶 中途を隔つる
〔七律。図・吾・殊・途 (上平声虞韻)〕	

卷名は第四句に「被柱」(『紫明抄』や『河海抄』といった古注の表記はこれ)

として詠まれている。被は珍しい表記かも知れないが「玉篇云、被(音彼。日本私記云、末木。今案、又杉一名也。見二爾雅注二)木名。作レ柱埋レ之、能不レ腐者也」(『和名抄』卷二〇)とあり、杉のこと。この巻は、先ず玉鬢を得て有頂天の鬚黒に對し(光源氏や内大臣の思いも綴られてはいるが)、心を病む彼の妻北の方の苛立ちと苦悩が描かれる。鬚黒が玉鬢のもとへ出かけようとするや、彼に火取りの灰をかける場面は殊に印象的なものであろう。彼が北の方を避けるようになり、彼女の父式部卿宮(紫の上の父でもある)が娘と孫娘を引きとることになる。卷名はその時詠まれた鬚黒の娘(と妻北の方)の歌に見えることによる。宮は光源氏を罵り、鬚黒にも冷たく對した。鬚黒は玉鬢を出仕させ、彼女の局は清涼殿に近い承香殿の東面に設けられたが、彼は気がかりでならず、男踏歌の折に退出を促す。その一方で、螢兵部卿宮・帝の玉鬢に寄せる思いが描かれ、光源氏も彼女への思いにくれる。そして、話は玉鬢の鬚黒の子出産へと展開している。聯毎に訳すと次のようになるうか。

人の心は手のひらを返すように変わるもので、眼の前(この物語の巻の中)にございます。古くから連れ添った北の方様に距離を置き、新たな女(玉鬢)を愛することとなりましたのは以前から意図してのことではございませんでしたが……。

たとえ(これ迄住まわれていた)邸宅を母君に従って出てゆくにいたしましたも、家の真木柱よ、いつも寄りかかっていた私のことは決して忘れないでね、とお嬢様(鬚黒の女)は歌にお詠みになり(書きつけ柱の割れ目に押込んだのでござい)ました。

(男踏歌の時)雲居におられます仙人とも思われます君達、殿上人御一行様が、(諸処を巡られ「竹河」を)謡われる明け方(の風情はまことに素晴らしなもの)でございます。(どちらでもそうですが、殊に玉鬢様のところでは)誰もが美しい薄絹の衣の袖の色重ね、その出衣の美しさは格別なものがございました。

(光源氏様は三月の山吹が美しく咲いている夕映えの中、歌を玉鬢様にお届けになりましたが)井手の山吹は已に今を盛りと咲いておりますもの、一体どうしたことでしよう、その美しい花(のようなあなた)は(私と井手の)中道により隔てられていることでございます(という内容なのでございました)。

首聯は鬚黒大将の寵愛が北の方(式部卿宮女)から玉鬢に移ったというこの巻全

体のありようを示していよう。「人心」は人の情。白詩にも多く見え、「太行之路能摧<sub>レ</sub>車、若比<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>是坦途」（『太行路』『白氏文集』卷三）とあり、「花心不<sub>レ</sub>得似<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>、一落<sub>レ</sub>底難<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>再尋<sub>一</sub>」（『落花』『菅家文集』卷五）「色見えうつつろものは世の中の人の心の花にぞありける」（『古今集』797小野小町）などと用いられる。「反覆」も「行路難、不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>水、不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>山、只在<sub>二</sub>人情<sub>一</sub>、反覆<sub>二</sub>間<sub>一</sub>」（『太行路』）「反覆何遺<sub>レ</sub>恨、辛酸是宿縁」（叙意一百韻）『菅家後集』などあって、変化し定まらぬこと、ころころ変わる意。「眼前」はすぐ目の前にあることで、「奢者狼藉儉者安、一凶一吉在<sub>二</sub>眼前<sub>一</sub>」（『草茫々』『白氏文集』卷四）と見えている。古くからの妻を「旧」、新しい妻を「新」と詠むのも、「新人迎來旧人棄、……迎<sub>レ</sub>新棄<sub>レ</sub>旧未<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>悲、悲在<sub>二</sub>君家留<sub>二</sub>兩兒<sub>一</sub>」（『母別子』『白氏文集』卷四）を利用したもので、首聯には白詩新樂府の表現が大いにとり入れられている。「不<sub>レ</sub>図」は思いもよらない、考え及ばない意。「子在<sub>レ</sub>齊聞<sub>二</sub>韶樂<sub>一</sub>、三月不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>肉味<sub>一</sub>。曰、不<sub>レ</sub>図<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>樂之至<sub>二</sub>於斯<sub>一</sub>也」（『論語』述而）「此処徘徊思<sub>二</sub>往事<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>図<sub>レ</sub>君去我孤留」（藤原有国「秋日登三天台過<sub>二</sub>故康上人旧房<sub>一</sub>」『本朝麗簿』卷下）はその例。猶、「兼」はここでは恐らく「予」（さきに、あらかじめ）の意で用いられているようで、とすればそれは国語の用法で、和習表現になろう。

領聯は、北の方が子らを連れて鬚黒のもとを去ることになった時、娘（真木柱）が日頃身を寄りにかけていた家の東<sub>ひがし</sub>面の柱に巻名にもなる歌を詠む次の条が背景となっている。

姫君は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、「見たてまつらではいかでかあらむ、いまでも聞こえて、また逢ひ見ぬやうもこそあれ」と思ほすに、うつぶし臥して、え渡るまじと思ほしたるを、「かく思したるなん、いと心憂き」などこしらへきこえたまふ。ただ今も渡りたまはなんと待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなや。常に寄りゐたまふ東面の柱を人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、椗皮色の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割れたるはさまに、笄<sub>かぎ</sub>の先して押し入れたまふ。

（姫）今はとて宿<sub>か</sub>離れぬとも、馴れきつる真木の柱はわれを忘るな、えも書きやらで泣きたまふ。

（③ 373頁1～13行）

「華亭」は故郷の家という程の意。晋の陸機が処刑される時に、昔栖んでいた郷里の華亭（呉の松江県の西方）の地を懐かしく想起し、あの鶴の鳴き声もう聞け

ないのだなと嘆いた故事による。「辞<sub>レ</sub>郷遠隔<sub>二</sub>華亭<sub>一</sub>、逐<sub>レ</sub>我来棲<sub>二</sub>緱嶺<sub>一</sub>」（『有<sub>二</sub>双鶴<sub>一</sub>留<sub>二</sub>在<sub>二</sub>洛中<sub>一</sub>忽見<sub>二</sub>劉郎中<sub>一</sub>依然鳴顧……』『白氏文集』卷五五）「欲<sub>レ</sub>和<sub>二</sub>豐嶺鐘聲<sub>一</sub>否、其<sub>二</sub>奈華亭鶴警<sub>一</sub>何」（兼明親王「夜月似<sub>二</sub>秋霜<sub>一</sub>」『和漢朗詠集』卷上・月256）などよく用いられる故事。「断当」は和習表現で、決してすべきではないぞの意。「世若未<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>我、雖<sub>レ</sub>退身難<sub>レ</sub>藏」（『詠興五首』其三「池上有<sub>二</sub>小舟<sub>一</sub>」『白氏文集』卷六二）「縦<sub>レ</sub>醉陶<sub>レ</sub>心忘<sub>二</sub>彼我<sub>一</sub>、酩酊無<sub>二</sub>処不<sub>二</sub>淹留<sub>一</sub>」（大伴池主「晚春遊覽」『万葉集』卷一七）「紅のあさはののに刺る草のつかの間も我を忘るな」（『古今六帖』三五九五）は「忘吾」の類型パターン。

頸聯は次の男踏歌の場面を詠んだものである。

踏歌は方々に里人参り、さまことにけにぎははしき見物なれば、誰も、誰も、きよら、を、尽くし、袖口の重なりこちたくめでたくとのへたまふ。……朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに夜明けぬ。

ほのほのとをかしき朝ぼらけ、いたく酔ひ乱れたるさまして、竹河うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌<sub>かたち</sub>きよげにうちつづきたまへる、いとめでたし。……やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひいまめかしう、同じものの色あひ重なりなれど、ものよりことにはなやかなり。

（③ 382頁5行～383頁6行）

猶、男踏歌の描写は初音卷（③ 158頁5行～160頁2行）にも見えている。「雲霄」は雲居の空。ここでは宮中（や高貴の人）を暗に指す。「雲霄高暫致、毛羽弱先摧」（『酬<sub>二</sub>盧秘書<sub>一</sub>二十韻』『白氏文集』卷一五）「昔侍<sub>二</sub>雲霄<sub>一</sub>携<sub>二</sub>冷影<sub>一</sub>、今沈<sub>二</sub>塵巷<sub>一</sub>隔<sub>二</sub>恩光<sub>一</sub>」（藤原茂明「八月十五夜詠<sub>二</sub>月<sub>一</sub>」『無題詩』卷三・136）は、高位高官に昇る意や宮中に在ることを言う。「仙客」は「蓬山仙客下<sub>二</sub>煙霄<sub>一</sub>、対<sub>二</sub>酒唯吟<sub>一</sub>独酌謡」（『呉秘監每有<sub>二</sub>美酒<sub>一</sub>独酌独醉……』『白氏文集』卷六六）とあり、仙界の人転じて高位高官の人を指す。貴公子を婿に迎えた父母が彼を「父母敬<sub>レ</sub>之如<sub>二</sub>三神仙<sub>一</sub>」（紀長谷雄「貧女吟」『本朝文粹』卷一・18）にもてなしたという例もある。見かけが世俗には存在しないような素晴らしさだったからである。ここでは、前掲文のように、男踏歌で貴公子達が諸所を巡る様子を表現している。「歌声」はここでは催馬楽の謡物である「竹河」を唱う声であることは前掲本文の通り。「羅綺」は薄物のあやぎぬ。綺羅に同じ。「娉婷似<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>羅綺<sub>一</sub>、顧聽<sub>二</sub>樂懸<sub>一</sub>一行復止」（『霓裳羽衣歌』『白氏文集』卷五一）「管絃声裏啼求<sub>レ</sub>友、羅綺花間入得<sub>レ</sub>群」（『賦<sub>二</sub>



鶯出<sup>ラ</sup>谷」『菅家文草』巻六）など美女の装いに用いる。「佳人」は「昔教<sup>ニ</sup>紅袖佳人唱<sup>ニ</sup>今遣<sup>ニ</sup>青衫司馬愁<sup>ニ</sup>」〔微之到<sup>ニ</sup>通州一日授<sup>レ</sup>館未<sup>レ</sup>安……〕『白氏文集』巻一五）「妖艶佳人望已断、為因<sup>ニ</sup>聖主<sup>ニ</sup>水亭傍<sup>ニ</sup>」（良岑安世「九月九日侍<sup>ニ</sup>宴神泉苑……」『凌雲集』）などとあり、美女を指し、「袖色」はその衣装の袖の色重ねを言う。

尾聯は、巻の終盤に近く、光源氏が玉鬘に手紙を認めた時の和歌「思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花」（③394頁7～8行）に関わって詩句に仕立てたものであり、その返歌は鬘黒が詠み代筆したのであった。「井手」はこの京都府綴喜郡井手町あたりとされる。同志社女子大学京田辺キャンパスから東方の木津川（昔は泉川と言った）方面に眺めやられる対岸の地で、「かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを」（『古今集』125読人不知）と古くから詠われ、山吹の名所として知られていた。「山吹」は和名表記で「欸冬 本草云、欸冬、一名虎鬚（一本冬作<sup>レ</sup>東也。和名、夜末不々木。一云、夜末布木）万葉集云、山吹花」（『和名抄』巻二〇）とある。「何為」は一体どうしてか、の意。「何為、腸中氣、鬱々不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>舒」（『続古詩十首』其八『白氏文集』巻二）「此地雖<sup>ニ</sup>身無<sup>ニ</sup>檢繫、何為、寸歩出<sup>レ</sup>門行」（『不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>門』『菅家後集』）などの例がある。「濃艶」は花のつややかで美しい様、こまやかな美しい色。「誰謂水無<sup>レ</sup>心、濃艶臨<sup>レ</sup>兮波変<sup>レ</sup>色」（菅原文時「花光浮<sup>ニ</sup>水上<sup>ニ</sup>一詩序」『和漢朗詠集』巻上・花117）など本朝ではよく用いられる。「中途」は歌の「井手のなか道」をふまえるが、仲を隔てる道の意でもあるから、和習的表現と言うべきか。

### 三十二 梅枝

百歩侍従焼厥香	百歩 侍従 厥の香を焼く
浅深互論校芬芳	浅深 互ひに論じて 芬芳を校ぶ
梅花東対春薫物	梅花は 東の対の春の薫物
荷葉本来夏御方	荷葉は 本来 夏の御方
延喜撰歌添玉色	延喜の撰歌 玉の色を添へ
弘仁宸筆耀燈光	弘仁の宸筆 燈光に耀かす
兎園手跡三行字	兎園の手跡 三行の字
感涙忽零心更傷	感涙 忽かに零ちて 心更に傷む

（七律。香・芳・方・光・傷（下平声陽韻））

第一句にも押韻する。巻名は薫物合せ後の月下の宴で、「弁少将拍子とりて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし」（③410頁14～15行）とあり、催馬楽の詞章名から採ったものである。漢詩には第三句に「梅花」として詠込まれているが、それは梅花香を指している。薫物合せ当日は「御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなさほど」（③405頁7～8行）で、「前斎院（朝顔の姫君）よりとて、散りすきたる梅の枝につけたる御文」（③405頁12～13行）も届けられており、この場面で基調となる花は梅なので、この表記を用いたのである。この巻は、二月十日の薫物合せと翌日の明石の姫君の裳着、二十余日の東宮の元服へと続く。そして、四月の姫君の入内を前に光源氏とその調度品を準備する条となり、多くの仮名書の論評が窺え、書美論を開陳しているのが注目される。その後の夕霧と雲居の雁の章は次の藤裏葉の巻へのつながりをもたせるものである。猶、漢詩は前半が薫物合せ、後半が仮名の書美論を反映したものとなっている。聯毎に訳を付してみたい。

（光源氏様により薫物合せが行われ）百歩や侍従といった香を薫きまして、その味わいの深さ浅さを互いにとり挙げ、（螢兵部卿宮様は）香りをくらべあれこれ評価なさったのでございます。

梅花香は東の対（にお住まいの紫の上様）の春にふさわしい香りでございましたし、夏の御方（の花散里様）はもとより夏にふさわしい荷葉香を調合された（のですがそれはしめやかな香りで懐かしいも）のでございました。

（光源氏様はまた、明石の姫君の入内の準備を進める中で、仮名の手本など様々にお選びになりましたが）螢兵部卿宮様がおとりよせになった延喜の帝（醍醐帝）の『古今和歌集』の玉の軸に添えて、弘仁の帝（嵯峨帝）の（古万葉集の）御自筆も加え、お二人は明るい燈火の下に御覧になるのでございまして。

親王（螢兵部卿宮）様のお書きになられた書は（古歌を選んで一首毎に）三行に書いたものでございましたが、（光源氏様の書もすばらしいもので、宮様が）にわかに感涙を落とされ、（物語を読む者も）一入しみじみと感動させられるのでございました。

首聯は、光源氏が螢兵部卿宮に薫物合せの判定役を依頼して、「人々の心々に合はせたまへる、深さ浅さを嗅ぎ合はせたまへるに、いと興あること多かり」（③408頁14～15行）と多くの方々の調合した香をあれこれ論評する条を背景とし、「侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ」（③409頁

2・3行）や、明石の君のところでは「百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集め」（④09頁13・14行）とある表現がふまえられている。従って、「百歩」と「侍従」は香名である。また、「浅深」はここでは嗅覚に関わる語である。

一般には「花含三春意無二分別、物感三人情有浅深」（『西省対花……』『白氏文集』巻一九）「煙霞遠近応三同戸、桃李浅深似勸レ盃」（菅原道真「花時天似レ酔」『和漢朗詠集』巻上・三月三日付桃40）などであるように、人の心の深浅や視覚的な色彩の濃淡に用いる例が多い。「互論」とあるが、物語では実質螢兵部卿宮一人が判定役で論評している。或は「互」にはあれこれと香をいろいろ採り挙げている意を込めようとしたものかも知れない。「芬芳」はかおりのことで、「刈レ蘭争二芬芳、採レ菊競二蔵薺二」（鮑照「夢還詩」『玉台新詠』巻四）「始識春風機上巧、非二唯織二色織二芬芳二」（源英明「落花散如レ錦」『和漢朗詠集』巻上・花121）などである。

頷聯も首聯とはほぼ同じ場面を背景とし、「対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり」（④09頁3・5行）とある紫の上の春の梅花香と、「夏の御方には……ただ荷葉を一種合はせたまへり」（④09頁7・9行）と花散里の夏向きの荷葉香を採挙げた条を詩句に詠んだもの。

頷聯は、仮名手本の書美論を展開する条で、螢兵部卿宮により提供された、「嵯峨帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四巻、延喜帝の、古今和歌集を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、綾の唐組の紐などなまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油みじかくまゐりて御覧するに」（④21頁9・14行）とある部分をふまえて詠む。「宸筆」は天皇御直筆の意。

尾聯は、頷聯の背景の少し前に戻り、螢兵部卿宮の書を光源氏が御覧になる場面「いといたう筆澄みたるけしきありて、書きなしたまへり。歌もことさらめき、側みたる古言どもを選びて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる、大臣御覧じ驚きぬ」（④19頁4・7行）と、逆に宮が光源氏の見事な書を見て「おほじかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべき方なし。

見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに」（④20頁1・3行）と思った条をふまえる。「兎園」は謝惠連「雪賦」（『文選』巻一三）に「梁王不レ悦、游二於兎園、廼置二旨酒、命二賓友、召二鄒生、延二枚叟二」とあり、李善注に「漢書曰、梁孝王、文帝子也。西京雜記曰、梁孝王好二宮室苑囿之樂、築二兎園、一也」と見えるように、梁の孝王の宴遊の場である。彼は漢の文帝の子、即ち皇子

（親王）であつたことから、本朝では「酒軍在レ座、兎園之露未レ晞、僕夫待レ衢、鷄籠之山欲レ曙」（紀齊名「仲秋陪二中書大王書閣二同賦三望月遠情多二詩序」『本朝文粹』巻八・205『新撰朗詠集』巻下・酒443）のように、親王やその邸宅の意で用いる。螢兵部卿宮（宮・親王とも記される）は桐壺院の子（光源氏とは兄弟）になるので用いられているわけである。「手跡」は筆跡のこと。「至レ今鉄鉢在、当レ底手跡穿」（遊二悟真寺二）『白氏文集』巻六）は文字通り手のあとだが、「以二手跡一賜二方国一者、皆一札十行、細書成レ文」（『後漢書』巻七六・循吏列伝序分）ともあり、書かれたものでもある。「感涙」は感動のあまり流す涙。「初逢二魚水一思波濁、共見二駿河一感涙流」（『桜島忠信落書』『本朝文粹』巻一二・388）は一例。

この詩は物語本文の用字をよく取込んで和習的であるが、「兎園」を親王と結びつけて表現している『本朝文粹』の用法、即ち平安朝詩文の措辞を継承しているところなどは興味深い（もつともこの詩のみのことではないが）。

### 三十三 藤裏葉

極楽寺中蕭索地	極楽寺の中	蕭索たる地
斎筵只見欲消霞	斎筵には只だ見る	消えんとする霞
藤招嘉客黄昏艶	藤は嘉賓を招く	黄昏の艶
菊喻貴臣玉律花	菊は貴臣を喻ふ	玉律の花
二葉松陰蘿始合	二葉の松の陰に	蘿始めて合ひ
一村薄下草猶加	一村の薄の下に	草猶し加ふ
金鑾促処舟浮水	金鑾促す処	舟もて水に浮かべ
奏賀王恩日漸斜	賀王恩を奏すれば	日も漸く斜めなり
（七律。霞・花・加・斜（下平声麻韻））		

巻名は第三・五句に「藤」「葉」として詠込まれている。この巻は、夕霧と雲居雁とその父内大臣の拗れた関係が修復され、二人の結婚が成立する過程から、明石の姫君の入内へと展開し、光源氏の四十賀の準備や、彼の准太上天皇、内大臣の太政大臣、夕霧の中納言への昇進が語られ、十月下旬には冷泉帝が朱雀院と共に光源氏の六条院に行幸されて宴が催されるという、光源氏の栄華の極みが描かれ、物語第一部の掉尾を飾るものとなっている。聯毎に訳すと以下になるだろうか。

（三月二十日、内大臣の母故大宮の一周忌が営まれました）極楽寺は（法会



も終つて、帰り際には「花が散り乱れて式場にはただ消えかかる霞<sup>かすみ</sup>が見えるばかりでございました。

(その帰りの折、大臣様は夕霧様に和解の態度を示されたのですが、四月の初めの)夕暮れ時、藤の花の美しさにかこつけて宴を設け(花と雲居雁様の美しさをアピールすべく)夕霧様をお客様としてお招きになったのでございます。(後に夕霧様は中納言に昇進なさるのですが、その時和歌に大輔の乳母が彼のことを「名だたる園の菊」とお詠みになられましたその)菊は名高い貴臣に喩えられ、晩秋を象徴する花なのでございましたね。

双葉の(ように夕霧様が)幼なかつた頃の(小さかつた)松も成長し、ツタ・カヅラの類が茂つて陰を成すようになり、一叢<sup>ひとむら</sup>のススキの下に草も茂り添うておりました(が、彼は三条邸に移り住まれてよく手入れをなさつたのでした)。

(冷泉帝・朱雀院の)乗物がお着きになり、(六条院の東の)池に舟など浮かべましてお迎えし、(皇恩を祝賀する)賀皇恩を(楽所の人をお召しになつて)演奏致しておりますと、日もまさに暮れ方となるのでございました。

首聯は、極楽寺での大宮一周忌の法会の場面と関わる。内大臣はじめ御子息や上達部など多くの人が参集したというから、その場を「蕭索」(心晴れやらぬ様、物さびしい様)とするのはしっくりしない気もするが、「しめやかに」という含意なのかも知れないと思う。また、第二句が「夕かけて、みな帰りたまふほど、花はみな散り乱れ、霞たどしきに」(③433頁3〜4行)をふまえ、やがて「心あわたたしき雨風に、みな散り散りに競ひ帰りたまひぬ」(③433頁15行)という状況になるのだから、或は第一句は法会終了後のひっそりとした場に立戻つた様を表現したのかと思われたりする。「極楽寺」は伏見深草に在つた藤原北家の寺で、基経・時平二代で成つた(「為三左大臣」請<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>下<sup>二</sup>以<sup>二</sup>極楽寺<sup>一</sup>為<sup>中</sup>定額寺上状」『菅家文草』巻九)。仁明天皇が芹川行幸の時、琴の爪を失つたところ、基経が求め得て、その地に建立されることになったという伝説もある(『大鏡』『宝物集』『河海抄』)。慶滋保胤(冬日於<sup>二</sup>極楽寺<sup>一</sup>禪房一同賦<sup>二</sup>落葉声如<sup>レ</sup>雨詩序」『本朝文粹』巻一〇・316)の叙述によると、滝や奇岩怪石のある象外の境、壺中の天の如き世界の地であつたらしく、「蕭索地」はかの寺の元来の環境を語るものであつたとも考えられる。「蕭索」は「秋日蕭索、浮雲無<sup>レ</sup>光」(江淹「恨賦」『文選』巻一六)のように秋(から冬)の景気に様に用いることが多いが、「厭<sup>レ</sup>風不<sup>レ</sup>定、風起花蕭索」(「落花」『白氏文集』巻五一)のように花の散る様にも表現されることからすると、先

の物語文中の「花はみな散り乱れ」にも重なり、訳出に当たってはこれを採用したが、「蕭索」の解釈は慮いの外厄介である。「蕭筵」は法会のこと。

領聯の第三句は、内大臣が夕霧との関係を修復すべく、藤花の宴に招く条に「四月朔日ごろ、御前の藤の花いとおもしろう咲き乱れて……御暇あらば立ち寄りたまひなんや」(③434頁7〜12行)とあり、内大臣が「わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりを」(③434頁13〜14行)と詠みかけ、夕霧が「なかなか折りやまどはむ藤の花たそかれどきのたどしきくは」(③435頁2〜3行)と答える場面を背景としている。また、第四句は話がかなり先に飛び、中納言に昇進した夕霧が、その昔自分に対し身分の低い者だと毒舌を吐いた大輔の乳母(雲居雁付き女房)に歌を寄せる次の条に依る。

女君の大輔の乳母、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、もののをりをに思し出でければ、菊のいとおもしろくうつろひたるを賜せて、

(夕霧)「あさみどりわか葉の菊をつゆにてもこき紫の色とかけきやからかりしをりの一言葉こそ忘れね」

と、いとにほひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしういとほしきものから、うつくしう見たてまつる。

(大輔)「二葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりきいかに心おかせたまへりけるにか」といふと馴れて苦しがる。

(③455頁1〜11行)

菊が色変わりするように、夕霧の身分も往時とは大きく変わったと言うのである。「嘉客」は良きお客様の意味で、「近日相尋処<sup>二</sup>勝形<sup>一</sup>、今招<sup>二</sup>嘉客<sup>一</sup>到<sup>二</sup>書亭<sup>一</sup>」(藤原明衡「暮春即事」『無題詩』巻四・225)とある。「惆悵春婦留<sup>レ</sup>不得、紫藤花下漸黄昏」(白居易「三月三十日題<sup>二</sup>慈恩寺<sup>一</sup>」『和漢朗詠集』巻上・三月尽53)とあるのは有名な「黄昏」(夕暮れ時)の一例で、しかも藤花と関わる点でも注意されようか。「貴臣」は貴顕の廷臣で、身分の高い臣下のこと。「得<sup>二</sup>追從<sup>一</sup>於此筵<sup>一</sup>者、珥<sup>レ</sup>蟬之貴臣、含<sup>レ</sup>鵝之狎客也」(大江朝綱「賦<sup>二</sup>聖化万年春<sup>一</sup>詩序」『本朝文粹』巻九・234)と用いられる。「玉律」は調律を定める基準となる玉製の笛のこと。「候氣之法、為<sup>二</sup>室三重、戶閉、塗墁<sup>一</sup>必周、密布<sup>二</sup>緹縵<sup>一</sup>。室中以<sup>レ</sup>木為<sup>レ</sup>案。每律各一、內庫外高、從<sup>二</sup>其方位<sup>一</sup>、加<sup>二</sup>律其上<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>三葭<sup>一</sup>率<sup>レ</sup>灰、抑<sup>二</sup>其內端<sup>一</sup>、案<sup>レ</sup>曆而候<sup>レ</sup>之。氣至者灰動。其為<sup>レ</sup>氣所<sup>レ</sup>動者、其灰散。人及風所<sup>レ</sup>動者、其灰聚。殿中候、用<sup>二</sup>玉律十二<sup>一</sup>」(後漢書「律曆上」とある。十二律は六律(陽)六呂(陰)から成り、前者には黃鐘・

大族・姑洗・蕤賓・夷則・無射があり、「季秋之月……其音商、律中無射」（『礼記』月令）とあるのに依れば、ここは菊花の開く晩秋九月のことと考えて良からうか。

頸聯の第五句の「二葉」は前聯の大輔の乳母の歌に詠まれていたものだが、ここはそれをふまえ夕霧の幼い頃の意味として用いられている。前聯の背景のすぐ後に、夕霧が昔を思い出しつつ暮らし始めた様子が、

すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のおはしましし方を、改めしつらひて住みたまふ。昔おほえて、あはれに思ふさまなる御住まひなり。前裁なども小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、「叢薄も心にまかせて乱れたりける、つくるはせたまふ。

（③455頁13行～456頁6行）

と描かれているが、それがこの一聯の背景と考えられようか。文中に「松」「蘿」は出てこないのだが、「小さき木ども」の成長したものと「繁き蔭」を各々それと見て詠んだものであろう。詩の「一村薄」は余りな表現と言えはそれまでだが、文中の「叢薄」に依るもの（かなり和文に引きずられて表現の和習化が強いに思われる）。

尾聯は光源氏六条院に冷泉帝・朱雀院の来駕がある条を背景としている。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉盛りにて……朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心をおどろかす……未下るほどに、南の寝殿に移りおはします。……東の池に舟ども浮けて……鶺鴒を召し並べて……。

（③458頁9行～459頁5行）

御馳走などお楽しみになり、居合わせた人々も酔い心地になる。そして、「暮れかかるほどに樂所の人召」（③460頁9行）して、

なまめかしきほどに、殿上の重べ舞仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。賀皇恩といふものを奏するほどに、太政大臣の御弟子の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。

（③460頁10～13行）

という場面である。「金鑾」は金の（立派な）鑾駕（輿）のことで、帝や院の乗物を指す。「鑾」は天子の乗る車馬に付けられた鈴。「賀王恩」は物語文中の「賀皇恩」に同じ。「教訓抄」（卷三・13賀王恩）によると、嵯峨天皇の時に大石峯良が作ったもので、「皇恩ヲ賀心ト謂レ之」内容のものと云う。「日漸斜」の「漸」は「猶正也」（『詩詞曲語辭匯釈』卷二・漸）の意であろう。前掲の白詩に見えた「紫藤花下漸黄昏」と同様の用法（まさにたそがれ時である）と思うので、日はまさに傾いている意。「行年三十九、歳暮日斜時」（『隠几』『白氏文集』卷六）「寸心言不<sub>レ</sub>尽、前路日將<sub>レ</sub>斜」（錢起「逢<sub>二</sub>俠者<sub>一</sub>」）「朗詠叢叢立、悠々忘<sub>二</sub>日斜<sub>一</sub>」（『牡丹』『菅家文草』卷五）は「日斜」（暮れ方になる）の例で、比較的よく用いられる表現である。

（続）